ノンフィクション・ノベル

K・K・K団の暗躍

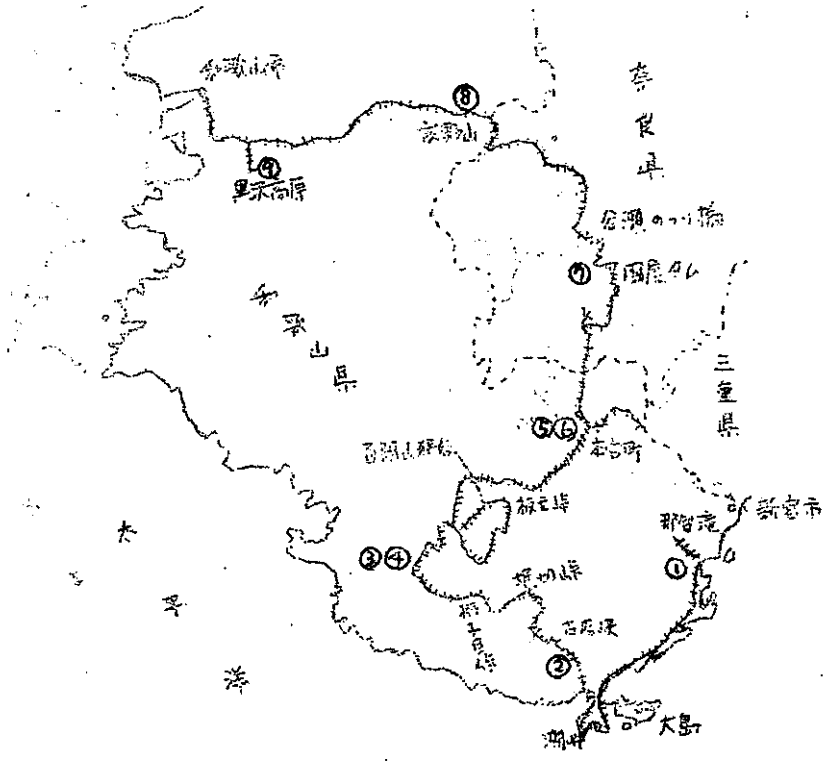
―春合宿の全容―

葉山宏幸

はじめに

ノンフィクション・ノベルとは、ノンフィクション(事実)を基にして書かれたノベル(創作)であって、純粋なノンフィクションではないので、多少の誇張が入ることをお断りしておく。尚彼ら4人組については、本文中仮名にしているが、正体を知りたいという方に、学籍番号にて代弁しておく。7545　8313　8211　9576

K・K・K団のとったコース ―― ○宿泊地



～序　章～

ある山の中の道。一台のバスが坂道を下っていた。その後ろには、一台の自転車がぴったりくっついていた。その自転車には、サイドバッグが前後2つずつ計4つ、ついていた。カーブにさしかかった。バスは減速して、慎重にカーブを切った。自転車は鋭くカーブを曲がった。そのとき、……道路上に石があった。自転車はそれに乗り上げ、転倒した。乗っていた男は投げ出されたが、ケガはなく、すぐ横になっている自転車に近づいた。しかし、それを見た男は天を見上げた。----フレームが折れていた。

所変わって、ある山の中の林道。一人の男が、自転車を横に、茫然として立っていた。☆道がない。道が落ちている。☆　しばらくして、意を決したかのように、彼は自転車からバッグらをとりはずし、別々にかついで、下に見える道まで降りていった。------仕事が終わった彼は、ただ「畜生」とつぶやいた。

第一章　異邦人　―永すぎた春―

3月26日昼、那智駅前にてK・K・K団の4人は合流した。一週間前から来ていた団長の"鳥打帽"。東京から走ってきて、名古屋でタルーカを換えた"フルサイド"。今、電車で到着した"タートル"と"未成年"の4人である。彼らは、那智の滝で身を清め、延命のお守りをもらい、明日に備えてYHで騒ぎ、叱られた。

第二章　水の葬列　―熊野島―

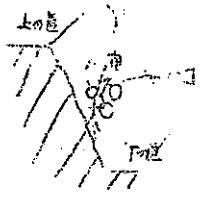
翌日、4人は本州最南端に向かって暴走し、途中で大島に渡った。船中、未成年は、財布をなくしたと騒いだが、あっさり見つかる。しかし、そのショックか、彼は当分の間　みんなに遅れをとる。大島の東端にある「トルコ軍遭難記念」は、係員のいないすきに、

無料(ダマ)で入る。その日の夜は寒かった。

28日は朝早く起き、午前中に3つの(絶切峠)峠を越え、買い出しをすませ、午後3時、河原にベースキャンプを張った。

第三章　風立ちぬ　―犬になりたくなかった犬―

29日、秘境百間山渓谷探険である。何も恐くないK・K・K団であるが、秘境という文句に恐れをなしたのか、パン一個で犬をボディガードに雇い、随行させた。探険途中、カメラのキャップを落としたフルサイドは、滝壺に決死のダイビングをおこなった。昼飯後、板立峠へ。途中、鳥打帽はうれしそうに、カツギをみんなに指示した。その夜、強風がテントを襲い、



翌朝、テント袋(?)が川にあと一メートルのところで見つかった。

第四章　魔の山　―偽だらけの山河―

30日、K・K・K団は人目を盗けるかの如く、途中から林道に入った。峡谷沿いの道、登りは鳥打帽がパンクしただけで無難に済んだが、下り------フルサイドがフルサイドの重みに耐えかねてかバースト。登りはトップだった未成年転倒。ゴール直前にフルサイド再びパンク。フルサイドの自転車終わる。

第五章　泥にまみれて　―エクソシスト―

31日、ウォータージェットに乗って瀞峡を見学してから、フルサイドは自転車修理のためバスで新宮へ。残りの3人は熊野本宮へ。そこで㊙班と合流、夜、TVでエクソシストを見る。㊙のメンバーでただ一人最後まで見ていた工氏は翌日、クリームパンから悪魔に

とり憑かれた。
1日、㊙と抜きつ抜かれながら北上。結局また同じYHに泊まる。

第六章　幽ぶらりんの男　―恐怖の谷―

谷瀬のつり橋にて。前日から腹の具合がおかしかったタートルは、元気につり橋を渡っていったが、途中でどういうわけか、はいつくばってしまった。彼は笑いで災厄に誤魔化した。フルサイドの自転車も不調。未だ年は好調だったが、その日の午後、大きな雹にぶち当たるのであった。

第七章　地獄変　―けものみち―

㊙と別れたK・K・K団の一行は、高野山への道へ。道はすぐダートになる。標高差約七百米。山あいを抜けるアップダウンの道。せっかく登った分を下り

ながら進む。未成年は後半は押しに徹する。それでも陽のある内に着いた。

その日の泊まりは高野山YH。当日の泊まり客は、男4女6。健全なるK・K・K団。場所柄か食事が終わるとすぐに部屋に帰ってスンガを読んでいたが、女人から一人来てくれとお呼びがかかる。リーダー鳥打帽が出向いてみると、親が出るとまずいので代わりに男に電話をかけてくれのこと。その日、途中銀行・民宿三連泊が決まった。さらに疲れていた彼らは早々に床につこうとしたが、坊主らが騒いでいて、安眠を妨げられた。

第八章　何処へ　―けものは故郷をめざす―

3日、高野山からの下りを快調にとばす。生石高原と黒沢高原のどちらに

しようか迷ったが、結局標高の低い黒沢高原を選ぶ。鳥打帽は途中でホビンを買いこみ、黒沢高原の登りで遅れをとる。その日は打ち上げということで、ビーフシチュー＋バターパンを買う。そして、いつものようにワンカップをあけた。

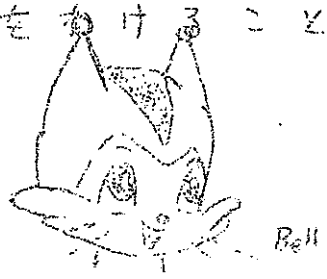
今日、和歌山まで走り、輪行して奈良まで、そして奈良から民宿まで。十日間にわたるK・K・K団の暗躍はここに終りを告げた。表街道を避け、人目を避け、裏街道を好んで走った。秘境を求め、かもぎ・押しをいとわず、最後は民宿に3日泊まった。彼らは南紀に何を残しただろうか。彼らはこれからどこへ行くのか。とにかく本編はこれにて終わりを告げる。

エピローグ

5日は、奈良で各自フリーランをおこなった。（フルサイドとタートルをいっしょで、門限を二時間オーバーした。）（未成年は寺・神社にはいかず、東の山を回って、門限より二時間早く帰ってきた。）

その日の夜、ふすま一枚隔てた向こうに、女子あまき2名が泊まったが、民宿の主人からふすまに釘を打ちつけ、K・K・K団の4人は顔も見なかった。また夕飯は外で食ったが、当然の如く、二人前食べた。

6日は、午前中フリーラン。夜、打ち上げ。鳥打帽は翌日から営業が始まるとかで、徹夜して、翌日一番の新幹線で東京に帰った。

あとがき（OSHI, PANK etc）

今回の合宿で、私は〝OSHI〟を3回だした。〝OSHI〟というものはパープッて、もうチャリンコに乗れる状態でなくなったとき、又はチャリンコを正常に運転できない道路に出会ったときにだすものである。最初の板立峠への〝OSHI〟は試にパープリンOSHIであった。高野山のときもそれに近い状態であった。しかし、2度目の〝OSHI〟は保険の〝OSHI〟であった。その証拠に　途中からDSHIたにもかかわらずトップに峠に着いた。余裕たとスピードも違う。それ以来、私はパープる前に、OSHIこと宣言としている。最後に、私は今までPANKしたことはないが、これは運転技術というより、タイヤが良かったせいであろう。しかし、そのタイヤもとっくに限界を通りこしている。今度の合宿では、新品のタイヤで現われ、パンクまたはバーストして、皆に迷惑をかけることであろう。